

三村將博士講演会（第 12 回グローバル COE 共催講演会：ユニット A）

- 主 催：日本ワーキングメモリ学会（第 5 回大会特別講演）
- タイトル：加齢とワーキングメモリ：老年期うつ病、アルツハイマー病、高齢者に
関する光トポグラフィと磁気刺激を用いた検討
- 日 時：2008 年 3 月 8 日（土）11 時 00 分～11 時 45 分
- 場 所：京都大学文学部新館 第三講義室
- 講 演 者：三村 將（昭和大学医学部准教授）
- お問い合わせ：大塚結喜（yotsuka@bun.kyoto-u.ac.jp）

（@が全角なのでコピー&ペーストするときには注意してください）

- 講演要旨：

ワーキングメモリ課題を遂行中の脳内活動を検討するには、さまざまな脳機能画像が用いられる。近年では、PET や fMRI とともに、非侵襲的で簡便な光トポグラフィを用いた報告が増えている。若年・高齢健常者、アルツハイマー病や老年期うつ病の患者さんを対象に、2-back 課題や乱数生成課題を用いて、前頭前野の酸化ヘモグロビン（oxy-Hb）値の変化を検討してきたわれわれの取り組みについて紹介する。これらはまだ研究途上であるが、今後、いくつかの認知課題と光トポグラフィを組み合わせ、アルツハイマー病と老年期うつ病とを鑑別し得る可能性がある。健常者や患者さんのワーキングメモリを薬物療法や非薬物療法による介入で改善していくことが可能であろうか。われわれは反復経頭蓋磁気刺激（rTMS）を用いて、ワーキングメモリ課題の成績を向上しようという試みを行っている。情報の保持期間に左頭頂葉にリアル刺激を当てた場合、シャム刺激を与えた場合と比較して、ワーキングメモリ課題成績自体には差はみられなかった。しかし、rTMS が保持と反応の過程に影響を与え、遠隔地である前頭前野の oxy-Hb 値に影響することが示されている。rTMS がワーキングメモリを増強させ得ると考える今日の知見と問題点について述べる。